介護老人保健施設しおん（宮城県石巻市）

動作を最大限引き出す歩行練習

安全懸架装置でリハビリ効果高める

（左から）石川マネージングディレクター、佐藤課長、PTの吉田直仁主任

風船バレーなど、安全懸架装置を活用してさまざまなリハビリに取り組む

宮城県石巻市の介護老人保健施設しおん（運営＝医療法人社団健育会）では、安全懸架装置を活用した歩行練習やリハビリテーションに力を入れている。転倒事故のリスクを軽減しながら、バランスを崩した際の立ち直り動作などを阻害せず、より効果的なリハビリが提供されている。

安全懸架装置を使ったリハビリでは、利用者に専用のハーネスを装着してもらい、天井のレールに沿って歩行練習を行う。転倒時には、床に倒れこんでケガをしないようにストッパーが作動。リハビリ専門職が転倒しないように介助する負担を軽減してくれる。

セラピストは歩行の様子をじっくり観察できる

同施設では構造上、天井にレールを埋め込むことができなかったため、やぐらのように組むことができるモリトー（愛知県一宮市、石田和彦社長）の据え置き型免荷式リフト「TPP」を導入した。施設の廊下に設置し、17・25mのレール2本を走らせている。安全懸架装置4つのうち、2つは免荷機能付きで、利用者の状態にあわせて下肢にかかる負担を調整することができる。

「支える介助」が動作を阻害

理学療法士で、同施設のマネージングディレクター・石川学さんは、「安全に歩行練習ができるのはもちろん、本人の動きを阻害せず、より引き出せるのがセラピストからみると最大の魅力」と強調する。「従来の歩行練習を行う場合、利用者がバランスを崩したら、当然我々は支えようとする。しかし、それでは自分でバランスを戻そうとする動きの練習ができない。安全懸架装置を使えば、バランスを崩しても手は出さず、利用者の立ち直り動作を引き出すことができる」とし、リハビリの効果が引き上げられると説明する。実際に歩行練習の様子を見せてもらうと、バランスを崩して転びそうな場面があったが、利用者は自分の力で体勢を戻していた。

安全懸架装置を活用した歩行練習は、リハビリテーション医学の権威で藤田医科大学最高顧問の才藤栄一氏による臨床試験から生まれた。才藤氏は、「人の反応時間は約3分の1秒とあまり早くないので、実際にバランスを損ないだしてから反応したのでは転倒を防ぎにくく、そのため、多くの場合、前もって対応することになる」とし、「立ち直りを体験する機会を奪ってしまう」と指摘。安全懸架装置の活用が、転倒のおそれがある歩行練習を「安全な危険」にすることができるという。

リハビリテーション課長の佐藤祐一さんも「従来であれば、バランスを崩した時にいつでも支えられるように、と意識がそちらへ向くが、安全懸架装置を使っているときは安心して体の動き全体をみることができる。『こんな動きもできるのか』と気づかされることが多い」と評価する。実際に見学をしていると、セラピストは少し利用者から距離を取って、一挙手一投足に目を配り、「もっと左足だせますか？」などと声をかけていた。

取材当日は、歩行だけでなく、風船バレーを取り入れて動作や反射を引き出すリハビリなども実施していた。どの利用者も慣れた様子で、積極的にリハビリに取り組み、「今日はとても調子がいい」などと担当セラピストと笑顔で振り返りを行う姿が印象的だった。脳卒中による片麻痺の人や脊髄損傷で下肢不全麻痺の人に対して安全懸架装置を使用して歩行訓練を行うことで歩行スピードの向上や歩く姿勢の改善がみられるという。より重度の人は、免荷して車いすから立ち上がり動作の訓練なども行う。

「当施設は入所だけでなく、在宅サービスも展開しており、『この地域に住んでいてよかった』と住民の方に思ってもらえる支援を常に目指している。安全懸架装置を活用したリハビリもその一環。今後も、その人らしい生き活きとした暮らしを支える地域拠点として、さまざまなチャレンジに取り組んでいきたい」（石川ディレクター）

介護老人保健施設しおんでの安全懸架装置を活用した歩行訓練・リハビリテーションの様子が、ニュースサイト「ケアニュース」で視聴できます。